



野こえ山越え8万キロ

広報車「りんどろ」乗員のメモから

県民の皆さんにおなじみの広報車「りんどろ」も二回目の新年を迎えました。三十三年の砂ホコリをすっかり洗いおとし、ハンドルにはしめなわ、拡声機にはおそなえ餅を飾り新春の陽の光にキラキラと輝いています。

今年もまた、県民の皆さんに県の仕事についておしらせやお願いをお伝えしたり、市町村の催しのお手伝いに出かけたり、又、災害が起れば緊急出動したり、皆さんへのサービスを第一と心得て、昨年にもまして駆け廻ろうと新年早々はりきっています。

この時にあたって、いままでの事をふりかえるのも意義あることだと思います。乗務員のメモを一寸のぞいてみました。題して「野こえ山越え八万キロ」

畑から手をふるオバサン 危い子供たちの「ピラハイヨー」

今日も快晴。「りんどろ」は快いエンジンの響を立て、進路は南。

もうS町も近い、インバーターのスイッチを入れるとグイーンという回転音。電圧OK。静かにダイヤルを廻して録音テープの音楽を流す。曲は県庁がRKKから出している県政だよりのテーマミュージック「ローズマリーポルカ」。軽快なリズムが畑をわたって町へ流れてゆく。

通行中の人、畑仕事の人々が何事かとふり返る。家の中から、露路の奥から走り出してくる子供達……音楽のポリリズムをダウンしてアナウンス第一声「S町の皆様、毎日のお仕事お疲れさま。こ

ちらは県庁の広報車りんどろでございます……」

「ピラはいヨー」「ふうせんはいヨー」道ばたで手をさし伸べている子供達の危いこと。これにはいつも運転手のMさんが泣かされた。今もMさんはスピードをおとして慎重にハンドルをきつてゆく。(隣の声「車中からピラ等を配ることは法律で禁止されています。）」

フト見ると畑仕事のおばさんが手を振っておられる。私達にとつてはこれが一番嬉しい。こちらも手をふつて応える。県民の皆さんの御声援に感えるためにも、私達は頑張らねばならないとしみじみ思う。

ここで、車内を見てもみよう。放送がよく周囲に浸透するように、文字どおりアナウンス、拡声機の調整係、それに運転手が三位一体である。遠くの部落にはアナウンスをゆつくりと、ポリウムはアップして、車のスピードをおとしてゆく。家並みではアナウンスを一寸はやく、ポリウムは少々ダウンして、車のスピードはうんとおとす。馬や牛がいたら驚かないよう直ちに音をきつてしまう。この書けば簡単だが、周囲の状況が時々刻々変つてゆくので仲々大変である。三人は神経をピンと張つて移りゆく周囲の状況を判断しながら進んでゆく。

もう町はずれ。「りんどろ」は多青い山脈のメロデーを初冬の野路にふりまきながら次のN村へ……。

「うどんり」?

命名うらばなし

昼食のため駐車している間に、学校帰りの小学生が「りんどろ」をとりまいて騒いでいる。

「おい、こん車は『うどんり』ばい」

「りんどろ」とくまもと号 走った距離が八万キロ

今「りんどろ」は天草郡を巡るため、三角から航送船に乗せられて、静かな冬の海を渡つてゆく。空はよく晴れているが、潮風は冷たい。天草を訪れるのはこれで三回目である。

思えば「りんどろ」もよく走つたものだ。ある時は春の阿蘇路を、ある時は炎

天下の熊本平野を、又、秋雨に煙る球磨盆地を、今また初冬の天草へ……それこそ春夏秋冬、肥後路をとこせせしと駆けめぐり、「りんどろ」誕生から現在までの走行距離は一万七千キロ。延べ日数一七四日というから、一年のうち三分の一以上は何時も県民の皆さんに直接お会いしているわけである。

ところで、広報車の走行距離を語る場合、忘れてはならないものがある。それは広報車「くまもと号」。これは、いわば「りんどろ」の姉さんだ。皆さんも御記憶があると思いますが、白と赤に塗りわけた「くまもと号」も、「りんどろ」以上に県内くまもと駆け廻つていた。三十二年の夏、パトンを「りんどろ」に譲つて、今は県警で再度のお勤めをしている。

「くまもと号」の走行距離は五年間にナント六万キロ。「りんどろ」のそれと合計すれば県の広報車は八万キロ、地球を二廻り近くしたことになるわけである……。

オ色兼備のミス(?)りんどろ

「りんどろ」のご自慢はいろいろある。モダンなスタイル、美しい色彩。さらには水色のベレー、白とうすみどりのセーターに濃緑のスカートのお嬢さんだ。頭の上にはテレビ・アンテナをきらめかして、十七インチのテレビが窓からのぞいている。

そのほか、映写機、幻燈機にテーブコーダー、拡声装置に発電機、サーチライ

ト等々……。「りんどろ」嬢も、まずはオ色兼備というところ。

だが重量はトラックも顔負けの六トン四〇〇というから、雨の日などうかつに細い路へはいれない。

「せひ〇〇部落へも、それから△△部落へも廻つてやつて下さい。りんどろ号がくるといつまで皆期待して待つていますから。」と予定外の行程を役場などから頼まれると、こちらも大いにカンゲキ。できるだけ御希望に沿うようにしているが、一番心配なのは、この六トン四〇〇という重量が、田舎の小さな軟らかい道をふみこわしてしまふおそれのあることである。

(御希望に沿えなかつたこともしばしばあります。こんなわけですから何とぞお許し下さい。)

泣かされた発電機

「くまもと号」で悪戦苦闘

「りんどろ」の乗員たちは、前に述べた「くまもと号」に忘れ得ない思い出を持つている。というのは「くまもと号」は「りんどろ」のように拡声機の電源としてバッテリーをもたず、発電機を使っていた。しかも、これがスイッチ一つでかかるものではなく、回転を起すには一旦車から降りて、車の胴体の扉を開け、それから手をさし入れて発電機のはずみ車にツナを巻き、一気に「ヨイショヨラシヨ!!!」と引っぱらねばならないという大変なシロモノ。

この発電機が仲々のキカン坊で、寒い時期など、二十回以上も同じ事を繰り返さねば回転を起さない。

「オツヒキ、よらよらぶじつとな？」

「ツナヒキしなすぶじつとな？」

乗員たちはニガ笑いがらツナを巻いて「ヨイショヨラシヨ!!!」

発電機「ダツダツダツ……ス……ス……ス……」

「ちがうぞ、「りんどろ」ばい」

「そんならこつちから読んでみい」

「ホンナコツ、「うどんり」たいなあ」

「ハハハ……」

皆一せいに笑い出した。

「広報車りんどろ」という名称も、今ではすっかり県民の皆さんになじまれました。この名称は、車が完成した三十二年の九月に、県民の皆さんから募集したもので、その入選作である。このほかにも色々あった。

「はるかぜ」「あさかぜ」「そよかぜ」などと、駆逐艦が急行列車みたいなのから、「いちよう」「しらぬひ」「火の国」「蘇峯」「噴煙」等々お国自慢調のものまであり、広報車に寄せられた皆さんの愛情には全く感激したものだ。……「オヤ、出発の時間だ。さあさあ子供さんはみんなのいてのいて。危いからね。」

後方確認……あつ、子供達が車体の後にぶらさがっている。これが又、乗員一同の頭痛の種。思わず「コラツツ危イヨツ」

(だが皆さんお許し下さい。こう叱るのもお子さん方に万一の事がないようにとの、乗員の切なる願いからなのですから。)

重傷者を助けた話

広報車は県民の皆さんへのサービスが第一である。だから色々な場面に出会わされることもある。

この話も「くまもと号」の時代。或る小さな部落へアナウンスも軽やかにはいつてゆくと、製材所から血相変えた男の人が「くまもと号」めがけて走つてきた。

「県庁の車ですか。すみません。たつた今製材機械で腕切つたのとおりますけん、病院に……」

聞くと速い、乗員たちは、血まみれになった負傷者を車内に抱え入れ、六キロも離れた病院へまっしぐら……とは云つても、車を飛ばせば出血が増えはげしくなるし、スピードをおとせば手おくれの恐れがあると……

「幸い手当てが早くして一命はとりとめました」という報告をあつて受けて、皆がこの様に喜んだ。

このほかにも、深夜の山道をトボトボと家まで帰る老人や娘さんを部落まで送つてあげたり、田んぼに落ちこんだ車を引っぱりあげたり、数えあげたらキリがない。

忘れた頃になつて、いつか引っぱつてあげたトラックと出合い、運転手さんからあらためてお礼を云われる時など、一寸いい気持ちである。まだまだいろいろなことがあつたものである。

ともあれ、今年もまた「りんどろ」は県民の皆さんの御期待を受けながら、元気で県政の広報に駆けまわります。どうかしつかり声援を送つて下さい。

(広報課)